

JFL 環境下で日本語を学ぶ学生による オンライン交流会実践報告

—チェンマイ大学(タイ) × 東海大学(台湾)—

本間結

1. 交流会実施の背景

近年、オンラインを活用した交流実践が数多く報告されている。とくに JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境下で日本語を学ぶ学生にとって、日本語を実際のコミュニケーション手段として用い、他大学の学生と交流する経験は、学習意欲や日本語使用への自信を高める重要な機会となり得る。本実践では、タイと台湾という異なる学習環境にある大学間でオンライン交流会を実施し、日本語を媒介とした学習交流および文化交流の場を創出することを目的とした。

なお、日本語による交流は必ずしも日本語母語話者との交流に限定される必要はないと考えられる。むしろ、日本語を学ぶ学生同士による交流は、言語運用能力や学習経験が比較的近いという点において、発話に対する心理的負担を軽減し、積極的な日本語使用を促す可能性がある。本交流会では、このような対等な立場での相互交流に着目し、日本語を学ぶ学生を対象とした交流の場を意図的に設定した。

2. 実施概要

本交流会の実施にあたっては、東海大学では日本語・日本文化学科の言語領域科目「日語表達與討論」が水曜日に実施されていたこと、またチェンマイ大学では水曜日が課外活動日であり、通常授業が行われていないことを踏まえ、水曜日に開催することとした。東海大学では、本交流会を授業内活動として位置づけ、日本語・日本文化専攻 3 年生の 30 名が参加した。一方、チェンマイ大学では授業外の自主参加型としたことで、参加者数の確保が課題となった。そのため、

「自宅からの完全オンライン参加」と「大学の教室に集まって参加」という 2 つの参加形態を用意し、参加に伴う心理的・物理的ハードルを下げる工夫を行った。結果として、1 年生から 4 年生まで幅広く参加者を募ることができ、計 21 名が参加した。さらに、タイと台湾の時差が 1 時間であることから、両大学の学生にとって負担とならない時間帯での実施が可能となった。

【日時】 2025 年 10 月 15 日(水) タイ時間 12:10-14:00 / 台湾時間 13:10-15:00

【時間】 120 分(実際の交流活動時間は約 100 分)

【参加者】 東海大学(台湾)3 年生 30 名、チェンマイ大学(タイ)1~4 年生(自主参加)21 名

【日本語レベル】 初中級(N4 以上)

【実施形態】 Zoom を用いたオンライン交流

3. 活動内容

本交流会は、①あいさつ・全体説明、②アイスブレイク、③インタビュー形式のグループ活動、④発表、⑤振り返りという 5 段階で構成した。②、③の活動は、ブレイクアウトルーム(以下、BOR)に分かれて実施した。各活動は、オンライン環境下でも学生同士が安心して日本語を使用し、相互理解を深められるよう設計した(表 1)。

表 1 交流会スケジュール

タイ時間	内容	活動の詳細
12:10-12:20 (10 分)	あいさつ・全体説明	教員からのあいさつ 交流会の目的と今日の流れの説明 注意事項(マイク・カメラの使い方など)
12:20-12:35 (15 分)	アイスブレイク (誕生日ごとに撮影)	1. 誕生日ごとに BOR に移動(1 分) 2. 自己紹介(名前・学年、2~3 分) 3. 喜怒哀楽の写真を撮影(3~4 分) 4. Google Form①に写真をアップ(2 分) 5. 全体でいくつか共有(3~4 分)

12:35-13:20 (45 分)	グループ活動 (インタビュー形式)	★チェンマイ大学と東海大学の混合グループ Google Form②を使用し、聞いた内容を入力 【日本語学習テーマ】 相手のおすすめの勉強法・おすすめアプリ 【文化交流テーマ】 相手のおすすめのもの 3 つ＋理由 教員は BOR を巡回してサポート
13:20-13:40 (20 分)	発表	各グループ代表が 1～2 分で成果を発表 面白い発見や印象に残ったことをコメント
13:40-13:50 (10 分)	まとめ・振り返り	Google Form③で感想や気づきを入力 教員からのコメント

3.1 あいさつ・全体説明

冒頭では教員より全体あいさつを行い、交流会の目的と当日の流れを共有した。本交流会の目的として、①日本語を実際のコミュニケーション手段として使うこと、②他大学の学生と交流し、多様な学習方法や文化的背景に触れること、③失敗を恐れずに発話することの 3 点を明示した。また、Zoom の基本操作、マイク・カメラの使用ルール、Google Form への入力など、オンライン活動における注意事項を確認し、活動中の混乱を防ぐよう配慮した。

3.2 アイスブレイク

アイスブレイクでは、誕生日ごとに BOR へ移動し、自己紹介とテーマに沿った写真撮影を行った(図 1)。誕生日という偶然性の高いグループ分けを行うことで、学年や日本語能力による固定化を避け、自然な交流を促すことを意図した。自己紹介では、名前・好きな食べものなどを日本語で簡潔に述べることを求め、発話のハードルを下げた。

続いて、「喜・怒・哀・楽」をテーマにグループ全体で写真を撮影する活動を行った(図 2)。それぞれの感情を表情やしぐさで表現することで、語彙や表現力に不安のある学生でも参加しやすい活動となるよう配慮した。さらに、写真撮影後には、なぜそのような表情にしたのか、何を考えてい

たのかを互いに共有することで、自然に会話が広がることを期待した。撮影した写真は Google Form①にアップロードさせ、教員が活動後に確認した。

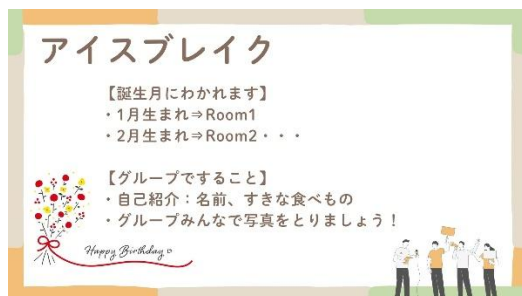


図1 アイスブレイク①



図2 アイスブレイク②

3.3 インタビュー形式のグループ活動

メイン活動では、チェンマイ大学と東海大学の学生混合の小グループに分かれ、インタビュー形式の交流活動を行った。グループ分けは、各大学の教員がランダムに行った。テーマは日本語学習と文化交流の2つとし、①おすすめの日本語学習方法及びおすすめアプリ、②相手の地域(チェンマイ・台中)のおすすめのもの3点とその理由を設定した。これらの課題は、学習面と文化面の双方を扱うことで、交流内容に広がりを持たせることを意図したものである。

学生は日本語でお互いにインタビューを行い、内容を Google Form②に記入した(図3)。口頭でのやり取りに加え、書く活動を組み合わせることで、内容整理と理解促進を図った。また、記録を残すことで、その後の発表や振り返りにも活用できるようにした。教員は BOR を巡回し、語彙の補足や沈黙が続いた場合の話題提供など、必要最小限の介入にとどめることを基本方針とした。

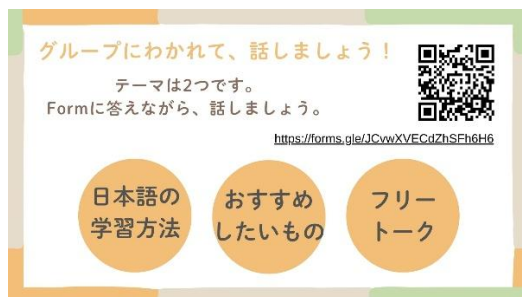


図3 グループ活動

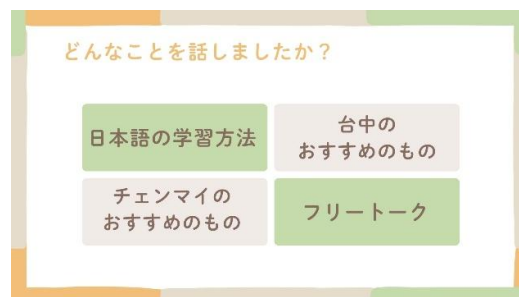


図4 発表

3.4 発表

グループ活動後には、各グループの代表者が1～2分程度で成果を発表した(図4)。発表内容は、学習方法やアプリ、おすすめのもので特に印象に残った点を中心とし、詳細な説明よりも要点の共有を重視した。

3.5 まとめ・振り返り

最後に、Google Form③を用いた振り返りを実施した。交流会を通して学んだこと、印象に残った点、日本語学習への気づきなどを主に選択形式で聞いた。この振り返りにより、交流体験を個々の学習経験として内省させることを狙いとした。教員からは全体を総括するコメントを行い、本交流会で得た学びを今後の日本語学習につなげるよう促した。

4. アンケート結果

本章では、3.5 まとめ・振り返りで回収した Google Form③のアンケート結果について述べる。アンケート項目は表2に示す。

表2 アンケート項目

項目1 選択肢	オンライン交流会は楽しかったですか。 ☐ とても楽しかった ☐ 楽しかった ☐ あまり楽しくなかった ☐ 楽しくなかった
項目2 選択肢	交流会で日本語を使うのは難しかったですか。 ☐ とても難しかった ☐ 少し難しかった ☐ あまり難しくなかった ☐ 全然難しくなかった
項目3 選択肢	交流会で一番よかったことは何ですか。(一つ選んでください) ☐ 新しい友だちができた ☐ 日本語を使えた ☐ 他の国の文化を知った ☐ 楽しい活動ができた
項目4 選択肢	交流会の時間は十分でしたか。 ☐ 長すぎた ☐ ちょうどよかった ☐ 短すぎた

項目 5 選択肢	また交流会に参加したいですか。 □はい □いいえ □わからない
項目 6 選択肢	交流会の後、日本語をもっと勉強したいと思いましたか。 □とても思った □少し思った □あまり思わなかった □全然思わなかった
項目 7 複数選択可	日本人ではなく、日本語を勉強している外国人と話して、どう思いましたか。 □安心した □自信がついた □はげまされた □難しかった □おもしろかった □とくに何も感じなかった □その他(自由記述)
項目 8 選択肢	他の国の日本語専攻の学生と話して、新しく分かったことはありますか。 □はい □いいえ
項目 9	「はい」と答えた人は、どんなことが分かりましたか。かんたんに書いてください。
項目 10	交流会の感想を書いてください。

アンケートの回答者数は計 45 名(チェンマイ大学 20 名、東海大学 25 名)であった。

項目 1「オンライン交流会は楽しかったですか」では、「とても楽しかった」「楽しかった」と回答した学生が 93.4%を占め、多くの学生が本交流会を肯定的に捉えていたことが分かる。

項目 2「交流会で日本語を使うのは難しかったですか」では、「とても難しかった」「少し難しかった」と回答した学生は 46.7%であった。一方、「あまり難しくなかった」「全然難しくなかった」と回答した学生は 53.3%であり、難易度の受け止め方にはばらつきが見られた(表 3)。

項目 3「交流会で一番よかったことは何ですか」では、「日本語を使えた」を選択した学生が 42.2%と最も多かった(表 4)。一方で、語学面以外の項目を選択した学生も一定数見られた。

表 3 項目 2 の結果

とても難しかった	8.9%
少し難しかった	37.8%
あまり難しくなかった	40%
全然難しくなかった	13.3%

表 4 項目 3 の結果

新しい友だちができた	13.3%
日本語を使えた	42.2%
他の国の文化を知った	22.2%
楽しい活動ができた	22.2%

項目 4「交流の時間は十分でしたか」では、「ちょうどよかった」と回答した学生が 75.6%を占めた(表 5)。項目 5「また交流会に参加したいですか」では、「はい」と回答した学生が 66.7%であった。東海大学では本交流会を授業内活動として実施しており、必ずしも全員が自主的に参加したわけではなかったが、それにもかかわらず、比較的高い肯定的な評価が得られた。

また項目 6「交流会の後、日本語をもっと勉強したいと思いましたか」では、「とても思った」「少し思った」と回答した学生が 100%を占めた(表 6)。

表 5 項目 4 の結果

長すぎた	15.6%
ちょうどよかった	75.6%
短すぎた	8.9%

表 6 項目 6 の結果

とても思った	62.2%
少し思った	37.8%
あまり思わなかった	0%
全然思わなかった	0%

項目 7「日本人ではなく、日本語を勉強している外国人と話して、どう思いましたか」では、3 割以上の学生が「自信がついた」「安心した」を選択しており、日本語を学ぶ学生同士による交流を肯定的に捉えている様子がうかがえた(図 5)。一方で、「難しかった」と回答した学生も約 3 割存在しており、交流において困難を感じた学生が一定数いたことが示された。

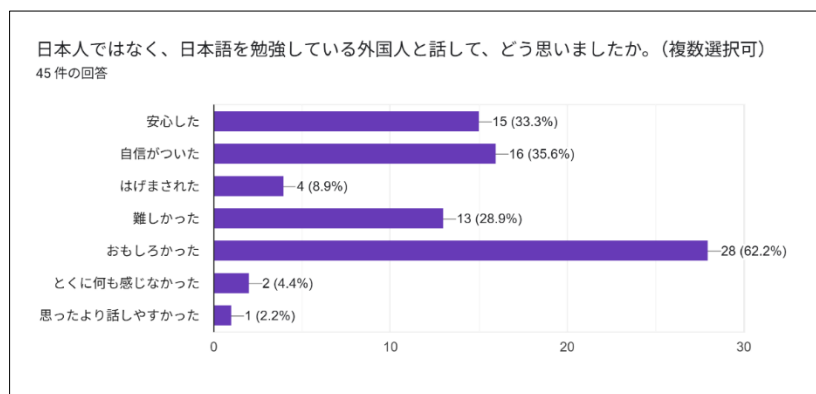


図 5 項目 7 の結果

項目 8、9「他の国の日本語専攻の学生と話して、新しく分かったことはありますか」では、共通してアニメに興味をもっていることや、相手の国の食べ物・飲み物に関するコメントが多く見られた。また、日本語を学ぶ学生同士という立場ならではの視点に言及する学生もいた。以下のコメントは、意味を損なわない範囲で表記を一部整えたものである。「みんなは日本人ではなくて、同じ国の人でもないけど、交流できるなんて、とても面白いです。」(東海大学学生)、「他の国の人たちと一緒に喋って、とても楽しかったです。自分みたいに、同じ外国人の立場に立って、日本語を学ぶのは面白いです。」(東海大学学生)、「みんなが簡単な日本語だけでコミュニケーションできることに気がつきました。」(東海大学学生)といった記述から、とくに東海大学の学生が、日本語を学ぶ学生同士の交流という本実践ならではの気づきを得ていたことがうかがえる。

項目 10「交流会の感想を書いてください」では、「日本語母語話者ではなくて、タイの学生たちと一緒にしゃべりしたのはとても良かったと思います！」(東海大学学生)、「日本語で他の国の人と交流するのは珍しいけど面白い」(東海大学学生)などの記述が見られ、本実践のねらいが学生に十分に伝わっていたことが確認できた。一方で、「過程が少し混乱している感じがして、スケジュールはあらかじめ伝えたほうが、慌ただしく見えないと思います」(東海大学学生)、「お互いインターネットが悪くて大変でしたが、とても楽しかったです！」(チェンマイ大学学生)など、運営面や通信環境に関する課題を指摘する意見も見られた。

5. 考察

本実践では、日本語母語話者を介さず、日本語を学ぶ学生同士がオンラインで交流する機会を設けた。その結果、交流の満足度や再参加意欲、日本語学習へのモチベーションにおいて、全体として高い評価が得られた。特に、項目 6 において「日本語をもっと勉強したいと思った」と回答した学生が 100%であった点は、日本語を相互理解のための手段として使用する経験が、学習者の学習意識に影響を与えた可能性を示している。

注目すべき点として、項目 7 において 3 割以上の学生が「自信がついた」「安心した」と回答したことが挙げられる。これは、相手が日本語母語話者ではなく、同じように日本語を学ぶ立場の学生であったことにより、誤用や流暢さへの不安が軽減され、心理的なハードルが下がった可能性を示唆している。学習者同士の交流では、信頼関係の形成を通じて不安が軽減され、心理的距離

が縮小することが指摘されている(Toyama & Yamazaki, 2021)。さらに、母語話者ではない相手とのやり取りにおいては、評価への不安が相対的に低くなることが示されており(Dewaele & MacIntyre, 2014)、心理的負担が軽減される傾向がある。このような心理的距離の縮小は、相互理解や共感を生みやすい環境につながるとされており、本実践においても、こうした安心感が学生の積極的な参加を促したと考えられる。一方で、同項目において約 3 割の学生が「難しかった」と回答していた点も看過できない。日本語母語話者が介在しない交流では、相手の発話の理解や意思疎通を学生同士で補い合う必要があり、その過程において負担を感じた学生がいた可能性がある。以上のことから、日本語を学ぶ学生同士の交流は心理的な安心感をもたらす一方で、一定の困難さを伴う活動であることも示唆される。

また、項目 8、9 の自由記述からは、アニメや食文化といった共通・相違点に関する気づきに加え、「同じ外国人として日本語を学んでいる」という視点への言及が多く見られた。なかでも、「簡単な日本語だけでコミュニケーションが成立することに気づいた」というコメントは、日本語を実際のコミュニケーション手段として捉え直す契機となった可能性がある。これは、日本語を「正確に」話すことから「伝える」ための手段として捉える意識の変化を示しており、学習者の日本語使用に対する態度に影響を与えたと言えるだろう。さらに、項目 10 の感想からは、日本語を媒介として他国の学生と交流するという活動そのものの新規性や面白さが、学生に強く印象づけられていたことが確認できた。日本語母語話者との交流ではなく、日本語を「共通語」として用いる国際交流の経験を提供できた点は、本実践の重要な意義の一つである。

一方で、様々な課題も明らかとなった。進行やスケジュールが分かりにくかった点、通信環境の不安定さに関する指摘は、オンライン交流の特性上、避けがたい問題であるが、事前説明や進行の可視化などにより改善の余地がある。今後は、事前に活動の流れを明示するとともに、トラブル発生時の対応方法を共有することで、より円滑な実施が可能になると考えられる。

以上より、本実践は、日本語を学ぶ学生同士の交流を通じて、心理的な安心感を伴った日本語使用の機会を提供し、日本語学習への動機づけを高める点で一定の成果を上げたといえる。今後は、継続的な交流会の実施や活動内容の精緻化を通して、学習成果への長期的な影響についても検討していく必要がある。

6. まとめと今後の課題

本実践では、タイと台湾の大学で日本語を学ぶ学生を対象にオンライン交流会を実施した。日本語母語話者を介さず、学生同士が対等な立場で交流する場を設定した点が本実践の特徴である。

アンケート結果から、交流会に対する満足度は高く、多くの学生が日本語を話すことに楽しさを感じていたことが明らかとなった。また、日本語を学ぶ学生同士の交流について「安心した」「自信がついた」といった肯定的な回答が見られ、発話に対する心理的負担を軽減し、日本語使用を促す効果が示唆された。さらに、交流後に日本語学習への意欲が高まったと回答した学生が多かったことから、本交流会が学習動機づけに一定の影響を与えたと考えられる。

一方で、活動の流れの分かりにくさや通信環境の問題など、運営面での課題も明らかとなった。また、本実践は1回のみの実施に基づくものであり、学習効果を直接測定するものではない点には留意が必要である。今後は、複数回の実施や学習効果の変化を測定する調査を通して、非母語話者同士のオンライン交流会がもたらす長期的な影響や学習効果との関連についても分析していきたい。

(本間結 ほんま ゆい チェンマイ大学人文学部東洋言語学科日本語科)

参考文献

- Dewaele, J.-M., & MacIntyre, P. D. (2014). The two faces of Janus? Anxiety and enjoyment in the foreign language classroom. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 4(2), 237-274.
- Toyama, M., & Yamazaki, Y. (2021). Classroom interventions and foreign language anxiety: A systematic review with narrative approach. *Frontiers in Psychology*, 12, 1-15.